

2022年1月30日顕現後第4主日

エレミヤ書1章4-10節

コリントの信徒への手紙一14章12-20節

ルカによる福音書4章21-32節

顕現後の主日も第4主日となりました。今年の大齋始日は3月2日、復活日は4月17日ですから、顕現後の主日がまだしばらく続きます。復活日の礼拝を、特に制限なく皆様とご一緒にお祝いできればと願いますが、そのように願うこと自体が、もう3回目となりました。未来のことを予測することはできませんが、良き未来が開かれますように、本日もみ言葉から学びたいと思います。

本日の旧約日課は、「エレミヤ書」です。エレミヤは、バビロン捕囚直前に、預言者としての召命を受けました。そしてイスラエルの南ユダ王国の崩壊という出来事を目撃した預言者です。本日の箇所は、その冒頭にある、エレミヤの預言者としての召命の部分です。

「**主の言葉がわたしに臨んだ**」（エレ1:4）とあります。「臨んだ」という部分には、物事の存在を表す「ある」という言葉が用いられています。この言葉は、「派生する、来る」とも訳せます。ここは「主の言葉」が主語ですので、「主の言葉がわたしにあった、来た」でもよいのです。この表現は、預言者が言葉を預かる時の定型句であり、預言者が預言者と呼ばれる所以です。すなわち、預言者とは、自分の考えや、自分の価値判断を語るのではなく、あくまで主なる神様から言葉を預かり、それを人々に語る職務だということです。「主の言葉」がなければ、何も語ることはできないのです。

「**わたしはあなたを母の胎内に造る前から、あなたを知っていた。母の胎から生まれる前に、わたしはあなたを聖別し、諸国民の預言者として立てた。**」（エレ1:5）は、エレミヤが主なる神様から受けた、その言葉の部分です。ここにある内容は、預言者の召命が、様々な人間的な事柄を超えていることを示しています。「**あなたを母の胎内に造る前からあなたを知っていた**」、この部分は、主なる神様がエレミヤを成長前から知っていたということです。エレミヤの召命が、時間的な前後関係を超越し、またその人間的資質を超えた事柄であることを示しています。次に「**わたしはあなたを聖別し**」とあります。ここにある「**聖別**」は、旧約では、「別にする」という意味があります。聖餐式などでわたしたちが用いる聖別と基本的意味内容は同じですが、預言者の召命にかかわる事柄としては、その預言者としての職務が、俗なる部分、すなわち人間的地平の概念を超えていることを意味しています。「**諸国民の預言者として立てた**」は、エレミヤの召命が、イスラエルという民族的枠組みを超えていることを、意味しています。先の聖別の部分とは少し視点が異なり、エレミヤは、イスラエルの主なる神様による、イスラエルへ遣わされる預言者なのですが、その目的は、イスラエルという枠組みを超えて、すべて民に向けられているのです。

このような神様の絶対的な召命に対して、エレミヤは、「**ああ、わが主なる神**

よ、わたしは語る言葉を知りません。わたしは若者にすぎませんから」(エレ1:6)と語り断わります。この召命に対する拒否に、エレミヤの様々な感情を、想像することができると思います。謙虚さ、自信のなさ、あるいは命の危険を伴う職務への恐怖などです。そのような感情の根本にある事柄は、自分に向けられた召命にかかわる内容が、自分の思いや考えを、すべて超えているということの認識があります。そして、そこから人間は、主なる神様の意思そのものに直面すると、ただただ恐れるしかないということを示しています。また同時に、預言者の召命および職務には、これぐらいの謙虚さも必要だということも示しています。先ほど触れた通り、預言者の思いや考え、あるいは能力に応じて語るわけではないからです。

主なる神様はそのようなエレミヤの反応を知った上で、彼を召命します。そして、「若者にすぎないと言ってはならない。わたしがあなたを、だれのところへ遣わそうとも、行ってわたしが命じることをすべて語れ、彼らを恐れるな。わたしがあなたと共にいて、必ず救い出す」(エレ1:7-8)と語ります。ここには、預言者が主なる神様が命じられたことを語ることで、主なる神様がともにいて下さること、そして、主なる神様が救い出して下さること、預言者にとって必要なことがすべて記されているといえます。

この箇所興味深いところは、主なる神様が言葉だけで終わっていないことです。「主は手を伸ばして、わたしの口に触れ主はわたしに言われた」(エレ1:9)とあるからです。実際に触れたのではなく、象徴的な意味であると思いますが、『旧約(聖書)』でも珍しい個所です。そして、主なる神様は「見よ、わたしはあなたの口に、わたしの言葉を授ける」と語ります。その内容は、「見よ、今日、あなたに、諸国民、諸王国に対する権威をゆだねる。抜き、壊し、滅ぼし、破壊し、あるいは建て、植えるために」(エレ1:10)です。新共同訳の「あなたに、諸国民、諸王国に対する権威をゆだねる」は、意識であり、ここに「権威」という言葉はありません。直訳すれば、「見よ、わたしは、今日、あなたを諸国民、諸王国の上に置く」となります。「口語訳」では「わたしはきょう、あなたを万民の上と、万国の上に立て」ですし、また「聖書協会共同訳」では「見よ、今日、私はあなたを諸国民、諸王国の上に任命する」となっており、エレミヤが主なる神様から、イスラエルという枠組みを超えて、諸国民と諸国王に対する何かを与えられたことを示しています。そして、その後、「～のために」と始まり、「抜くこと、壊すこと、滅ぼすこと、破壊すること、建てること、植えること」と六つの目的が続きます。破壊的な目的が4つ、建設的な目的が2つですが、預言者の職務がそれだけ責任が重いことを示しています。

さて、本日の福音書は、先週の続きです。しかも、「そこでイエスは、『この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した』と話し始められた」(ルカ)という一節が重なっています。先週は、イエス様が『聖書』を読まれたということを中心にこの箇所から学びましたが、この節で終わっていたからです。しかし、ここにある「ルカによる福音書」のお話自体は、イエス様についてのよい結末となるお話ではありません。本日の箇所である、お話の後半部に

本格的な展開があります。

「皆はイエスをほめ、その口から出る恵み深い言葉に驚いて言った（ルカ 4：22）とあり、この箇所は、イエス様をほめたたえているように思えます。しかし、次の「この人はヨセフの子ではないか」という発言から展開が変わります。この発言が、多様な暗示的意味を持つからです。同じ個所で、「マルコによる福音書」では、「マリアの子」となっていますから、それと比較しますと、イエス様に対する明確な批判的な響きはありません。また「ルカによる福音書」は、ヨセフに対して、「ダビデ家のヨセフ」（ルカ 1：27）と説明していますから、ヨセフという言葉も特別な意味内容はありません。しかし、この言葉の後、イエス様は、「きっと、あなたがたは、『医者よ、自分自身を治せ』ということわざを引いて、『カファルナウムでいろいろなことをしたと聞いたが、郷里のここでもしてくれ』と言うにちがいない。」（ルカ 4：23）と話し始め、「はっきりしておく。預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ」（ルカ 4：24）と、故郷ナザレの人々を批判し始めます。そして、それが27節まで続きます。それゆえ「これを聞いた会堂内の人々は皆憤慨し、総立ちになって、イエスを町の外へ追い出し、町が建っている山の崖まで連れて行き、突き落とそうとした。」（ルカ 4：28-29）となります。ただし、「しかし、イエスは人々の間を通り抜けて立ち去られた」（ルカ 4：30）とありますので、実際には誰も突き落とさなかったようです。

なぜそうってしまったのか。その問いを解く鍵は、故郷ナザレの人々の言葉、「この人はヨセフの子ではないか」（ルカ 4：22）にあります。この発言自体は、直接的には、イエス様がヨセフの子であるということ以上の意味はありません。しかし、間接的には、より広い意味を持ちます。ただし、「ルカによる福音書」は、ここまでにヨセフという登場人物に関して明確な説明をしていませんので、読者の想像に任されているといえます。そして、「皆はイエスをほめ、その口から出る恵み深い言葉に驚いて」という事柄を前提に考えなければなりません。イエス様を高く評価するという認識を前提に、ナザレの人々の「イエスとはわたしたしと同じ仲間のヨセフの子」であるという認識、それが何を派生させるのかということです。それには、単なる驚きを超えて、疑い、批判、期待などを派生させる可能性があります。平たく言えば、「ヨセフの子なのにありえないだろう」という否定的な対応から、「仲間のヨセフの子なら、同郷のわたしたちには、他よりも優先的にもっとたくさんの奇跡を起こすだろう」という過度な期待などが、想像できるということです。

イエス様が、25節から27節にあるイエス様の『聖書』のお話を用いた批判内容は、「イスラエル」が優遇されるわけではないという内容です。そこから考えますと、「ルカによる福音書」の著者が、読者に想像してほしい内容は、故郷の人々が優遇されるわけではないということであると思います。つまり、「イエスはお育ちになったナザレに来て、いつものとおり安息日に会堂に入り、聖書を朗読しようとしてお立ちになった」（ルカ 4：16）で始まったお話が、このように展開するのは、「ルカによる福音書」の著者が意図していることです。それは、歴史を通してつながっているイスラエルではなく、その枠組みを超えた、悔

い改めた人々の集まりである教会、その教会という新しいイスラエルが、イエス様によって誕生するということを示しているのです。

そこから考えますと、先週の部分についても振り返る必要があります。「**主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである**」(ルカ 4:18)という言葉、そしてその言葉が実現する、現実となる、具体化されるというイエス様の恵み深い言葉、ナザレの人々は、それらをイエス様の意図通りには理解できなかったのです。彼らは、古いイスラエルのまま、その預言の内容も実現も理解していたのでしょう。先にエレミヤの召命の記事で見た通り、主なる神様は、イスラエルの神様ですが、イスラエルだけの神様なのではありません。「諸国民、諸王国」にエレミヤを遣わす神様です。また、イスラエルを愛されるのですが、その愛は、すべての人々に及びます。そのことは、イエス様によってより明確になるのですが、先に見た通り、エレミヤの召命にもそのことが示されています。しかし、自分たちを優先的に愛さない主なる神様をイエス様が提示した時、ナザレの人々は激しく反発したのです。

わたしたちは、イエス様に対して、ナザレの人々と同じようは反応を持つことはありません。むしろ、わたしたちは、むしろ主なる神様の愛をうけたものとして、どのようにそのことを社会に示していくかを考えなければなりません。その意味では、召命という言葉、聖職者に関してよく用いますが、教会に呼び集められた方々はみな、主なる神様の召命を受けているのです。そして、その召命の目的は、集められた教会から、主なる神様の愛を示すことです。

本日の使徒書で、「**あなたがたの場合も同じで、霊的な賜物を熱心に求めているのですから、教会を造り上げるために、それをますます豊かに受けるように求めなさい。**」(1コリ:14:12)。これ以降、内容的には、異言について展開されるのですが、ここでは「造り上げる」という動詞が用いられています。この言葉は、具体的に家を建てるという意味ですが、精神的に、何かを考え出すという意味にも用います。

教会に集められるわたしたちが一人ひとり異なるように、教会は一つですが、それぞれの違いがあります。同じ聖公会であっても、共通する部分があり、また違いがあります。それゆえわたしたちは、同じ聖公会でありながら、わたしたち独自の教会を造り続けることを、主なる神様から託されています。わたしたちの東京聖三一教会は、東京教区の中で最も長い歴史を持つ教会であること、集められる皆さまの賜物、大きな会堂、広い敷地など、様々な豊かさがあります。それらを通して、どのような教会を造り続けるのか、そのことへと今までもこれからも召されているのです。それは、わたしたちの教会が、主なる神様から託された責任がより重いということでもあります。わたしたちだからこそ成し遂げられること、そのことの実現のために、今年も祈りつつ一緒に励みたいと思います。